

報告

第 19 回中部支部会の報告

～11 月 13 日から 14 日 黒田市吉田科学館にて～

大西浩次（長野工業高等専門学校）、大西高司（名古屋市科学館）

1. はじめに

中部支部では、毎年、天文教育・普及に關する情報交換を目的とした支部会を開催している。平成 22 年度（第 19 回）中部支部会は、11 月 13 日から 14 日まで、富山県黒部市の黒部市吉田科学館（図 1）、および生地（いくじ）第一温泉を会場として行われた。参加者は 30 名で、13 件の発表と 2 件の特別講演（市民講演会を兼ねる）、および 3 件の市民向け講演会が行われた。

黒部市吉田科学館は、北アルプスを源流とする黒部川が富山湾に注ぎ込む河口の西側、黒部市生地（いくじ）にある科学館で、出来てから 25 年。20m ドームの中にミノルタの MS-20AT プラネタリウムがあり、このプラネタリウムを中心に、天文教育や発明教室、黒部川の水や生地の湧水群を中心としたフィールド・ミュージアムなどの科学教育が行われている。今回、中部支部会の開催に合わせて、黒部市吉田科学館では「プラネタリウム祭り」を企画し、中部支部会との共催で、支部会の特別講演会を市民向けの講演会として一般の人々に聞いてもらうことにした。



図 1 黒部市吉田科学館

2. 初日のプログラム

今回のプログラムでは、初日はプラネタリウムを使った実践教育をテーマに、伊東昌市氏（国立天文台天文情報センター）による基調講演（図 2）の後、4 件の一般発表があった。夕方、黒部市吉田科学館天文教室をサポートする形で、「世界一受けたい街角天体観望会」を企画していたが、あいにくの天候のため、観望会に参加した親子 5 組に対して、名古屋付近で活躍している街角観望会グループ T-Walkers のメンバーを中心に数人ごとにチームを組んで、プラネタリウムの星空を使った街角（プラネタリウム？）星空観望会を実施した。

2.1 基調講演

伊東昌市氏（国立天文台天文情報センター）による基調講演「4 次元プラネタリウム Mitaka」と「プラネタリウムの歴史」を市民向け講演会と合同で実施した。黒部市吉田科学館プラネタリウムのなかで、4 次元デジタル宇宙ビューワー「Mitaka」を用いた迫力ある立体ムービーコンテンツの紹介があった。



図 2 伊東昌市氏による基調講演

2.2 一般発表 I (発表者は敬称略)

「名古屋市科学館新館の現状」

大西高司 (名古屋市科学館)

2011 年春オープン予定の名古屋市科学館の新館建設状況を、実際の写真を交えながら紹介。すでにプラネタリウムは完成・調整中。

「博物館と連携したプラネタリウム実習」

伊藤信成 (三重大学教育学部)

四日市博物館で行われているモバイルプラネタリウムを使用した学習投影に、学生が授業の一貫として協力した記録を紹介。

「ゲリラ観望会@名古屋の活動録」

安藤徹 (愛教大理科教育)

名古屋市内で大学生有志が行っているゲリラ観望会の活動について、その活動の原点から現在までの流れを紹介。

「これからの T-Walkers」

山根宏大 (T-Walkers(名古屋大学))

名古屋市内でゲリラ観望会の活動を行っている T-Walkers のこれからの展望を、現在の活動から見いだされる問題点とともに紹介。

3. 2 日目のプログラム

2 日目は、早朝、黒部市吉田科学館学芸員の王生 (おぐるみ) 透氏のガイドによる生地の湧水群の水巡りを行った。その後、再び黒部市吉田科学館において、9 件の発表と嶺重慎氏 (京都大学大学院理学研究科・宇宙物理学教室教授) によるブラックホールの講演会を実施した。

3.1 一般発表 II (発表者は敬称略)

○「星のふるさと館でつくった「星空ガイドブック」」

細谷 一 (上越清里星のふるさと館)

星のふるさと館で自主出版したガイドブックについて、その作成過程から内容、反響までを紹介。

○「月の満ち欠けモデルと月の観察好期早見盤の作成」

船越浩海 (ハートピア安八)

工作による、月の満ち欠けモデルを紹介。また、自作の月齢早見表を実践例もあわせて紹介。

○「バリアフリー科学絵本プロジェクト」

嶺重 慎 (京大)

視覚障害者のための天文教育教材について、実際に作成された教材をもとにして、どのような点に注意して作成すべきかという点からその実践例までを紹介。

○「2012 年 5 月 21 日 全国横断金環日食に向けて」

大西浩次 (長野高専)

再来年にせまった金環日食について、あらためて紹介するとともに、昨年の皆既日食の例から、全国的な日食の観測運動をどのように展開していくかについて報告。

「東信地区の活動状況(上田創造館の観望会)」

松井 聡 (長野県丸子修学館高校)

上田創造館の天文台、観望会の実施状況などについて紹介。

○「星空案内人について」

黒田晃由

星空案内人の資格を、実際に受講し、資格を取得した立場から、星空案内人の資格受講制度について紹介。

「T-Walkers の活動」

北村研人 (名古屋大学)

T-Walkers の活動について、今後の展望を紹介するとともに、金山駅でのゲリラ観望会や、12 月の皆既月食についての展望について紹介。

「SOLA 三重大学公認天文サークルについて」

小川嘉哉 (三重大学)

三重大学の公認天文サークルの現状と活動状況の報告。

○「観望会で使用できる自作アイテムの披露」

寺島 浩二

観望会で天候が悪い時、天体が見えなくても、天体を見た気分になれるような自作のビューワーを紹介。これは、カメラマウントを組み合わせて、天体スライドを交換することによって、任意の明るさで天体をのぞくことができる器具である。

3.2 夏の年会・今後の活動方針など

2011年8月に名古屋科学館新館で行われる予定の天文教育普及研究会年会について、実行委員長の著者である大西高司より現状を報告した。また、年会のテーマについての盛んな議論が行われた。たとえば、「天文教育活動を如何に若手に伝えていくかということが課題となってきた」、「それなら、“継承”“伝える”という意味合いの言葉を、テーマに盛り込んではどうだろうか」、「いや、“伝える”だけではなく、“発展”という意味合いの言葉も入れてはどうだろうか」と白熱した。予定の時間もオーバーしてしまい、テーマの決定は宿題となってしまった。しかし、年会を受け入れる側として、参加者全員にそれなりの心構えを持ってもらえたのが最大の収穫だろう。

3.3 特別講演会

中部支部会の最後は、嶺重慎氏（京大：本会会長）による「ブラックホールの常識と非常識」の市民向け講演会であった。これまでの常識をくつがえす、新「ブラックホール」の話の基本から最新成果まで、美しい画像と楽しい余談を交えながら講演された。

4. 「プラネタリム祭り」の講演会

黒部市吉田科学館の「プラネタリム祭り」として、中部支部会の前後に市民向けの3つの講演を行った。その1つが、著者である大西浩次による「はやぶさ・最後の光の秘密」、そして、もうひとつが伊東昌市氏による「4

次元プラネタリム Mitaka」と「第二の地球探し」である。そして、「プラネタリム祭り」最後の企画が、「星と音楽の夕べ」だった。富山市を中心に演奏・作曲、そして黒部市吉田科学館のプラネタリム制作に関わっている滝沢卓氏によるシンセサイザーの即興演奏と大西浩次の「星景写真」とのコラボであった。この二日間を通じて、プラネタリムを活用した活動の多様性と可能性を、多くの市民に宣伝できたのではないかと考える。

5. おわりに

今回の中部支部会の参加者は30名で、その半数以上が若い学生たちであった。この若い感性が今後の天文教育を支えて行くのだろう。

最後に、中部支部会の開催においては、黒部市吉田科学館の館長、事務局長、学芸員、職員の方々の多大なご協力をいただきました。特に2日目の王生透氏のガイドによる生地の湧水群の水巡りは、いつも空を見ている私たちに、大地と地中を流れる水の織りなす豊かな恵みの存在を気づかせてくれるものであり、黒部市吉田科学館が、大地、水、大気、星という宇宙（コスモス）を相手とする総合的なフィールド・ミュージアムの形へと発展するのではと感じました。

大西 浩次（長野工業高等専門学校）

大西 高司（名古屋科学館）